

フン時代の考古学(下) : フン型?

著者	林 俊雄
著者別表示	HAYASHI Toshio
雑誌名	金大考古
号	82
ページ	33-47
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00069162



フン時代の考古学(下):

「フン型」鍍

林 俊雄

I. 鍍の研究史概説

青銅製の鍍(釜)は、スキタイ時代の少し前の前9世紀ころからユーラシア草原地帯に広まり、後5～6世紀ころに消滅する。その数は、北中国とモンゴルで約240点、南シベリアで約140点、天山北方で約70点弱、ユーラシア草原西部の先スキタイとスキタイの鍍が65点弱、サルマタイは約155点弱と数えられている[草原考古研究会2011]。これに対して、フン型の鍍は天山から中欧まで分布範囲は広いが、数はわずかに31点に過ぎない(そのうち完形品は16点)と2011年に書いたが、その後10年少々で点数は40点余り、完形品は20点余りと増えた。

最も初期(スキタイ時代)の鍍は一對の円形の取っ手を持ち、その上に1つの突起が付いている(図1-1)。口は広く、胴部はあまり深くない。底は丸い。スキタイとサルマタイの鍍も取っ手は円形か半円形で、3つの突起が付いている(図1-2, 3)。口縁部に動物像が付き、胴部が水平線やジグザグ線で装飾されることもある(図1-4)。これらとは全く異なるタイプの鍍が、ドナウ川中下流域とヴォルガ川中下流を中心に西はポーランド南部から東はモンゴル西北部から出土している。それが「フン型」鍍である。

ドナウ川とヴォルガ川のそれぞれ中下流域は、ヨーロッパに侵入したフン族の中心地の一つ

と考えられている。この地域で19世紀中頃から、独特な器形と装飾に特徴のある鍍が発見されている。それらは、スキタイやサルマタイの一般的な鍍のように胴部がふくらむことはなく、①器壁は垂直で縦長、つまり寸胴形である。②また把手の形も異なり、円形や半円形ではなく方形である。③把手の中に列点紋あるいは隆起直線紋が入ることもある。④器体の口縁に沿って細かい格子紋(まれにジグザグ紋)がめぐることが多い。⑤胴部は水平と垂直の1～3本の凸線によって四分割されている。⑥口縁や水平の隆起線からは玉のれんのような紋様が付けられていることも多い。⑦四分割線のすき間の下方に逆三角形あるいは下向きの矢のような紋様があることもある。

最大の特徴は、⑧方形の把手の断面が凹字形を呈



1. ベシュタウ Beshtau 鍍
北カフカス中央部, 前8世紀
(ピャチゴルスク郷土史博物館
Pyatigorsk Local History Museum 蔵)



2. スキタイの鍍
黒海北岸出土, 前5～4世紀
(エルミタージュ美術館
Hermitage Museum 蔵)



3. 南シベリア・ミヌシンスク盆地,
タガール文化の鍍, 前5～4世紀(ミ
ヌシンスク郷土史博物館 Minusinsk
Local History Museum 蔵)



4. 初期サルマタイの鍍, 西北
カザフスタン, 前3～2世紀(オ
ラル郷土史博物館 Oral Regional
History Museum 蔵)

図1 スキタイとサルマタイの鍍

していることと、⑨把手の左右と上に大きな平面的なキノコ形の装飾が付いていることである(図2)。把手の断面が凹字形を呈していることは東方の匈奴の鍔と共通する特徴であり、きわめて重要である。またスキタイやサルマタイの鍔でも取っ手の上に小さな突起が付くことはあるが、このように派手な装飾が把手の上ばかりかその両側にまで付くことはない。装飾が過多であるため、実用品ではなく、儀式や祭祀で使われる儀器・祭器であろうと考えられる。

このようなユニークな特徴をもつ鍔も、当初はスキタイの鍔の一種と考えられていたが、19世紀末になって、それよりは数百年後の「民族大移動時代」のものとする研究者が現れてきた。まずヴォシンスキが、アルタイのテレッコエ湖出土の鍔との類似から、民族大移動時代のものとする説を出した(III-b-2)[Wosinsky 1891: 430]。さらにライネッケが、シレジア地方のヘックリヒト Höckricht(現ポーランド南部 Jędrzychowice イェンジホヴィッツェ)で民族大移動時代に典型的な宝飾品とともにこのタイプの鍔が出土したことから(I-a-1)、鍔もスキタイ時代ではなく民族大移動時代のものであると結論付けた[Reinecke 1896: 12-13]。その後、この説を補強する研究が相次ぎ、定説として認められるに至っている。

フンが活動した時代に、フンの中心地で使われた儀器ということがほぼ明らかになってきたため、この鍔には新たな役割が付与されることになった。匈奴=フン同族説の証拠の一つとして取り上げられるようになったのである。フン型鍔は匈奴によって東アジアからもたらされたという説は、タカーチによって1913年に『トゥラーン』*Turán* という雑誌にはじめて発表されたというが[Takács 1955: 145; Bóna 1991: 220]、私はまだこれは見たことがない。中国北部出土の鍔が型式変化を遂げながらシベリアを通り、ウラルを越えて東欧にまで至ったとする説は、その後も多くの研究者によって継承されている。たとえばボコヴェンコとザセツカヤ、エールディ、郭が鍔の研究史をまとめたうえで、かなり幅広く資料を集めて移動ルートを解明しようとしており、私自身も基本的にその説を支持する論文を発表している[Bokovenko, Zasetskaya 1993; Érdy 1995; 林 1995; 郭 2007]。

批判的な説については、(d) 起源、伝播、編年の項で述べる。

フン型鍔のリスト作成も古くから行われている。上記のボコヴェンコ、エールディのほかに、ヴェルナー、メンヒェン=ヘルフェン、コヴリグ、ハルホクとディアコネスク、ポーナ、コッホの鍔リス



I-b-5 テルテル Törtel 鍔
ハンガリー 高さ 89cm, 最大級, 圈足部は後補. 特徴: ①②④⑤⑥⑧⑨ (ハンガリー国立博物館 Hungarian National Museum 蔵)



II-c-2, オソカ Osoka 鍔
ヴォルガ中流. 高さ 53.5cm, 特徴: ①②③⑤⑥⑦⑧ (ロシア・国立歴史博物館 State Historical Museum 蔵)



I-b-4 カポシュヴェルチ Kaposvörgey 鍔, ハンガリー. 高さ 57cm, 圈足は後補. 特徴: ①②④⑤⑥⑧⑨ (ハンガリー国立博物館 Hungarian National Museum 蔵)

図2 フン型鍔

トがある [Werner 1956; Maenchen-Helfen 1973; Kovrig 1973; Harhoiu, Diaconescu 1984; Bóna 1991; Koch 1997]。またアンケは、包括的な遺跡ごとのカタログの中に鍔も収録している [Anke 1998]。私もこれらに加えて、土製鍔も含めたカタログを作成した [林 2011]。マシエクは新しい資料をさらに付加している [Masek 2017]。

私は本稿で 2011 年以降発表された資料を列挙し、さらに一覧表を作成した。また鍔の出土地、用途、起源、型式について考えをのべたい。なお記号は 2011 年発表時のものを踏襲する: I. 東ヨーロッパ、a. ポーランド、チェコ、スロヴァキア、オーストリア、b. ハンガリー、c. ルーマニア。II. 黒海西北岸からウラル・西シベリアまで、a. 黒海西北岸、b. 北カフカス、c. ヴォルガ・ウラル・西シベリア。また鍔であるかどうか相当にあやしいもの、土鍔は省いた。

II. 新たに発見された資料

■ I -a-2 サノク Sanok 鍔

ポーランド東南端、ポドカルパツキエ州サノク郡サノク。2017～18 年、複合遺跡で道路工事の際に緊急発掘が行われた [Okońska-Bulas, Bulas, Mazurek, Garbacz-Klempka, Perek-Nowak 2020]。小さな流れのある緩やかな丘で集落址が発掘され、ほぼ 3 世紀半ばから 5 世紀前半にかけての層から、青銅鍔断片 3.6 × 3.4cm が発掘された。3 本の隆起線の入った器壁の一部である (図 3)。

■ I -a-4 ミロティツェ Milotice 鍔

チェコ東北部ブルンター Bruntál 市の東郊、ミロティツェ・ナト・オパヴオウ Milotice nad Opavou 村近くの溝で、地表から深さ 20cm のところに発見され、2013 年 4 月にブルンター市の博物館に持ち込まれた。発見時の情報はわずかであっ



図 3. I-a-2, サノク Sanok 鍔
東南ポーランド

た。青銅鍔 (図 4-1) の断片の、幅 165mm、高さ 150mm、厚さ 4mm から 8mm。3 本の隆起線のある器壁の縁辺部と思われる。同じくチェコのシレジア地方出土のラーゾヴァー鍔 (I-a-3) と同一個体とする見解がある (図 4)[Kahoun 2019: 133]。

■ I -a-5 リヒノフ Lichnov 鍔

チェコ東北部ブルンター市リヒノフ村、ラーゾヴァーの北わずか 10km の深さ 10cm のところで、2009 年に金属探査中に発見された。把手の上か両側に立つキノコの 1 つである (図 5)。キノコの傘が小さいのが特徴である。テトレフスキー Tetřevský 川の左岸からわずかに 3.5m か 4m しか離れていないため、川で運ばれてきた可能性もある。その場合、ラーゾヴァー鍔と同一個体かもしれない [Loskotová 2013: 140; Bříza - Janáková 2016: 42; Masek 2017: 77]。

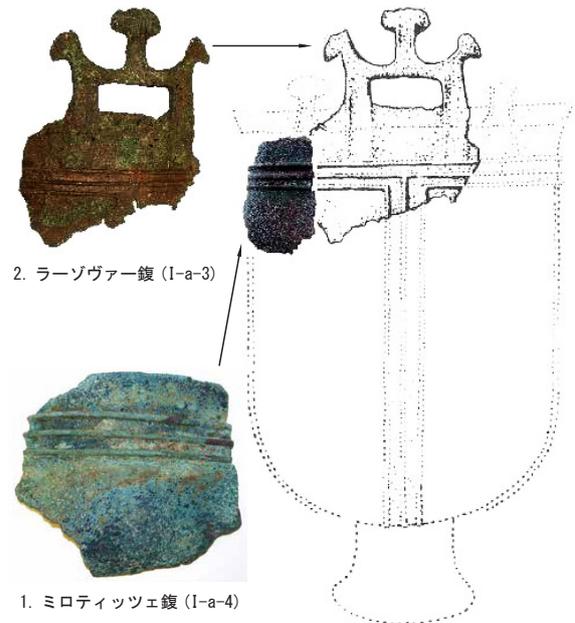


図 4. ミロティツェ鍔ならにラーゾヴァー Rázová 鍔 (I-a-3) との接合予想図

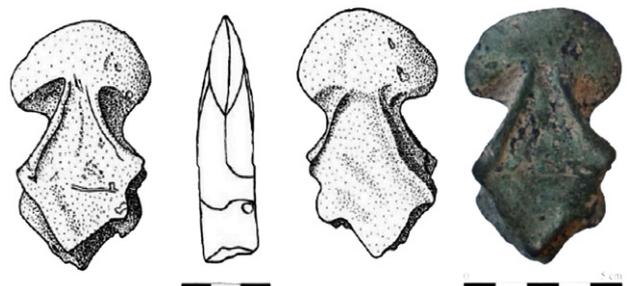


図 5. I-a-5, リヒノフ Lichnov 鍔, チェコ東北部.
残存長約 8cm.(クルノフ市博物館 Krnov City Museum 蔵)

■ I -b-1 オーチャ Ócsa 鍍

2014年12月、中部ハンガリー、ペシュト郡のオーチャ郊外でアマチュアの金属探索家が鍍の断片を発見し、フェレンチー博物館 Ferenczy Museum に届け出た [Masek 2017: 75]。発見地点を調査したところ、ローマ期から中世までの集落址から様々な遺物が出土した。断片は三角形を呈しており、高さ6.6cm、幅6.4cm、厚さは最大で1.2cmである。復元例にあるように、胴部の上の方にある3本の水平線であることは間違いないが、問題はその下の紋様である(図6)。玉が垂れ下がる玉のれんの紋様はよく見られるが、みな1本ののれんに1個の玉である。このように2本の斜めののれんに1個の玉という例はない。

■ II -a-4 ペレヴォロッチナ Perevolotchna 鍍

私の調べた限り、ペレヴォロッチナ村はチェルニヒウ州プリルツキー Priluts'kii 地区にあるが、ママエフとマシエクによればもっと東南のドニプロ川左岸で、ヴォルスクラ Vorskla 川が注ぎ込むすぐ近く、ポルターヴァ州にある [Mamaev 2014: 62; Masek 2017: 78]。出土品は一括で20世紀初頭にポルターヴァ博物館に個人コレクターらによって届けられたが、1943年に博物館が焼け落ちた時に損傷を受けた。博物館に来た時にはすでに破片になっていたようだ [Masek 2017: 78, fig.7]。胴部と底部の断片、3ないし2本の分割線、口縁部の細かい格子紋様、把手の上のキノコと両側に立つキノコの断片がある(図7)。把手の上に立つキノコには下に続く二重の列点紋がある。

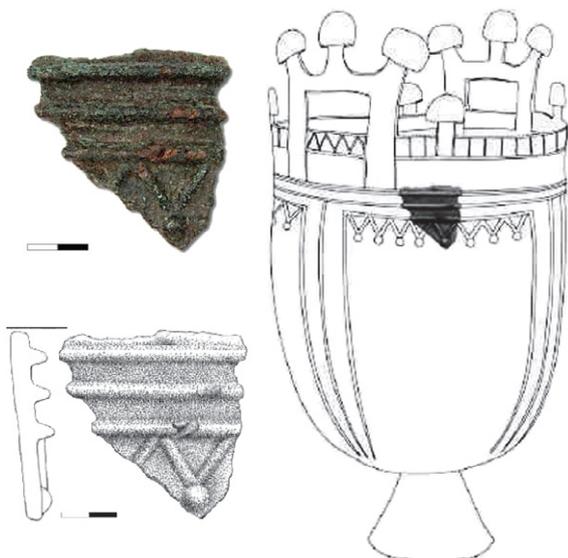


図6 I-b-1, オーチャ Ócsa 鍍, ハンガリー中部

■ II -b-2 ブジョル Buzhor (アナパ Anapa) 鍍

クバン川流域で知られている2か所の発見地点の1つ [Masek 2018: 51, 8. kép.]。タマン半島の東南端、ブジョルの郊外にある。3つの断片があり、玉のれんと分割線の間の二重の列点紋が見られる(図8)。

■ II -b-3 マライー Malai (クバン Kuban) 鍍

クラスノダール市の北方、ティマシェフスク市の西方、マライー村の近くに、多数の小古墳があるが、1986年の調査でそのうち初期青銅器時代の小墳(1号墳)に民族大移動期の再利用墓(12号墓)が発見された [Limberis & Marchenko 2011: 420]。1



図7 II-a-4, ペレヴォロッチナ Perevolotchna 鍍, ウクライナ

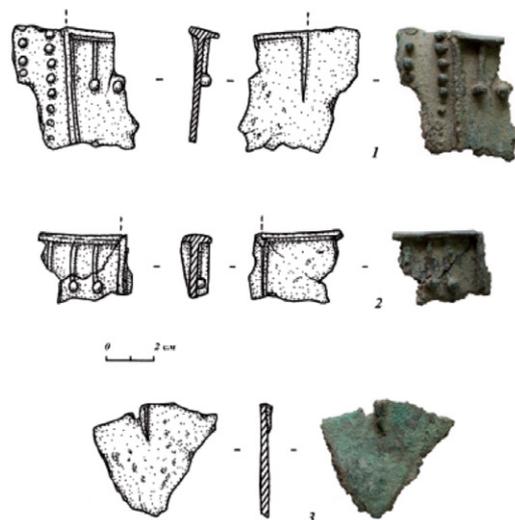


図8 II-b-2, ブジョル Buzhor 鍍, タマン半島

号墳のまわりに溝があり、13頭分の馬の骨が確認された。主体部はシャフト墓で、35～40歳の頭蓋変形の男子(モンゴロイドとユーロペオイドの混合型)[Limberis & Marchenko2011: 438]と、成年と子供の馬の骨(全部ではない)が入られていた。また鞍と思われるものと銀製の飾り板が発見された。図が掲載されていないので断定はできないが、この時代によく見られる銀製の居木先飾りと思われる[Limberis & Marchenko 2011: 422]。さらに柄に七宝細工のある剣や銀製の跨帯金具、弓の部品、札甲、鉄製銜の断片などとともに、鍋と鍔が出土した(図9)。鍔は22の断片に壊れていた。復元すると、寸胴というよりは徐々に底部に向かってすぼまっている。把手の上には水滴状のふくらみが続いている。玉のれん紋様ののれんの部分が極端に短くなったもののように見える。把手の両側に縦に続く小穴状の紋様は類例がない。四分割線が3～2本なのはよく見られる[Limberis & Marchenko2011: 424]。この墓は年代を決めることが難しい。鍔と剣はフン時代に属するが、それ以外のものは6～7世紀と幅広い。結局報告者は、6世紀前半は無理としても、少なくとも6世紀中葉とすべきだとする[Limberis & Marchenko2011: 439]。マシエクはこの墓を地元のアラン人に結び付け、5世紀の第3三半期(467～500年)と早くしている[Masek 2017: 79]。アラン人と関係があるかどうかはともかくとして、5世紀の範囲内に属することは確かであろう。なぜならば鞍は出土していないからである。なお鍋は鍛造で、復元図から判断すると高さ23.2cm、胴部の直径36cmである。いわゆるフン型鍔ではない。

■ II -b-5 ナスル・コルト Nasyr-Kort 鍔

1995年、II-b-4のハバズよりやや東方、イングシェチア共和国の首都マガス Magas から北、スンジ Sunzhi 川左岸のナスル・コルト村へ延びる自動車道工事中に発見された[Мамаев 2014: 55]。墳丘のない地下横穴墓が4基確認され、そのうち1号墓で鍔の断片が発見された(図10)。報告者のママエフは、ルーマニアのデサ鍔 I-c-4、ヨネシュティ鍔 I-c-7、モルドヴァのシェスタチ鍔 II-a-1、ウクライナ東部のペレヴォロッチナ鍔 II-a-4、バルカリアのハバズ鍔 II-b-4に近いという[Мамаев 2014: 62]。断片には、3本からなる四分割線、口縁部に直接立つ1つのキノコ、四分割線から垂れる玉のれんの紋様が確認される[Мамаев 2014: 63]。

■ II -c-1 ソリヴィチェゴドスク Sol'vychegodsk 鍔

2011年に発表した報告ではヴェルフニー=コネツ Verkhnij-Konets 鍔と記したが、出土地がやや不正確であったので、あらためて記す。現在はアルハンゲリスク州に属するが、革命前はヴォログダ Vologda 県に属していたため、現在もヴォログダ州地方博物館に所蔵されている。

■ II-c-3, II-c-4 スンチェレイェヴォ Suncheleyevo 鍔

タタルスタン共和国アクスバエフ Aksubaev 地区タタルスコエ・スンチェレイェヴォ Tatarskoe Suncheleyevo 村で、1982年に2点の鍔が発見された(図11)[Боталов 2009: рис.10-7, 8; Боталов 2019: 102, 104; Троепольская 2015: 261; www.tataroved.ru – татароведение – археологические памятники I тыс. н.э.]。発見時の状況など、詳細は不明である。

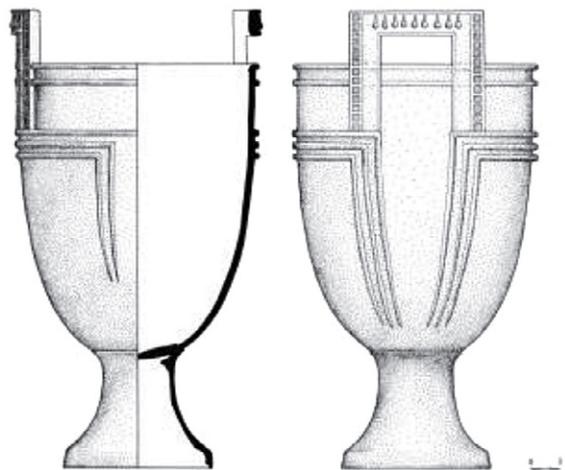


図9 II-b-3, マライー Malai 鍔, クバン川北岸

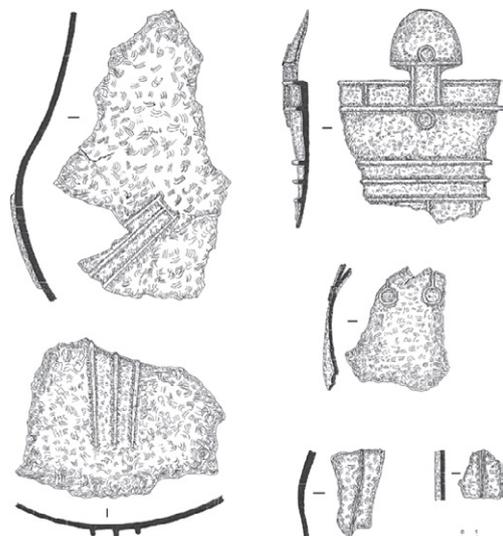


図10 II-b-5, ナスル・コルト Nasyr-Kort 鍔, イングシェチア

スンチェレイェヴォ 1 号鍔は四分割線の中と方形の把手の縦のラインにはコンマの連続紋様、把手の水平のラインには列点紋、口縁とその 1 段下のラインには玉のれん紋様がある (図 11-1)。

スンチェレイェヴォ 2 号鍔は把手が半円形ときわめて異例であるが、把手の縁が立っていて中がやや凹んでいること、口縁より下に隆起線が走り、口縁はそこから立ち上がっていること、器体が縦長寸胴であることは、フン型鍔の特徴である (図 11-2)。大きさは不明だがスンチェレイェヴォ 1 号鍔と並べて描かれた図 (図 11-3) が実態をあらわしているとすれば、1 と 2 とはほぼ大きさは等しいと思われる。イスケ (古) カザン歴史文化自然保護区博物館蔵¹⁾。

■ II -c-5 ツィムリヤンスコエ Tsimlyanskoe 鍔

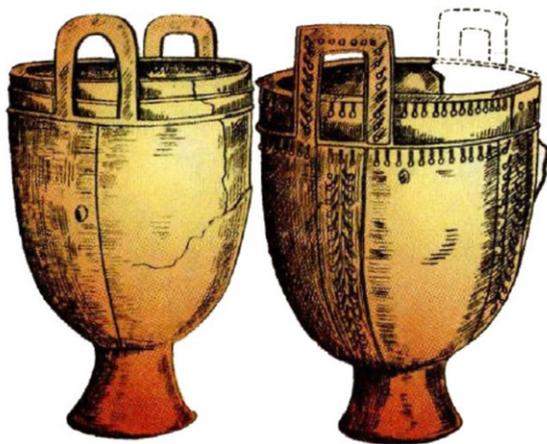
2015 年秋、極度に乾燥した夏のせいでドン川の下流に当たるツィムリヤンスコエ貯水湖の湖面が 36m から 31m まで下がった。本来なら東岸から 1.0 ~ 1.5km の、ヴォルゴグラード州カラチョフスク Kalachyovsk 地区ログフスキー Logovskii 村ペルヴォマイスキー Pervomaiskii 集落から南南西へ 8.0km、ドン川に流れ込むムィシュコヴァ川の川床の北側に青銅器の断片が多数あり、地元住民が発見して集めたが、翌年の春先には湖面の水準はもとに戻ってしまった [Круглов 2021: 112]。

断片は大小さまざまで、150 点ある (図 12) [Круглов 2021: 113]。すべて同一個体に属する。方形の把手の上には 3 つのキノコが立ち、両側には 1 つずつキノコが立っている [Круглов 2021: 132, ris.3]。キノコや把手は列点紋で豪華に装飾されている。単なる列点紋だけでなく、二重、三角形、玉のれん、斜め連続など、多種多様な列点紋を駆使

下流に当たるツィムリヤンスコエ貯水湖の湖面が 36m から 31m まで下がった。本来なら東岸から 1.0 ~ 1.5km の、ヴォルゴグラード州カラチョフスク Kalachyovsk 地区ログフスキー Logovskii 村ペルヴォマイスキー Pervomaiskii 集落から南南西へ 8.0km、ドン川に流れ込むムィシュコヴァ川の川床の北側に青銅器の断片が多数あり、地元住民が発見して集めたが、翌年の春先には湖面の水準はもとに戻ってしまった [Круглов 2021: 112]。



1. 1 号鍔 II-c-3 2. 2 号鍔 II-c-4

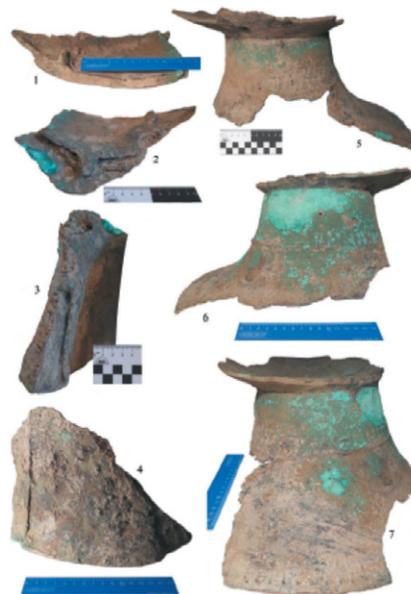


3. 1 号鍔 (右) と 2 号鍔 (左)

図 11 スンチェレイェヴォ Suncheleyevo 鍔



把手表裏付
近断片



底部付近断片

図 12 ツィムリヤンスコエ鍔の一部

している。全体の高さは90～100cm、胴部の直径は45～50cmに達し [Kруглов 2021: 114]、重量は90kgという推定もある。これは現存で最大のハンガリーのテルテル鍔(高さ88～89cm、直径46～48cm)に匹敵するか凌駕する大きさである。大きさと紋様の豪華さことから、マスコミでは「アツティラの鍔」と呼ばれている¹²⁾。

■ II-c-6 サマラ Samara 鍔

サマラ市のヴォルガ川東岸すぐ近くで発見された。8点の断片からなる(図13)[Masek 2017: 80]。把手はないがその両側に立っていたキノコが見つかっている。口縁には格子紋様が見られる。口縁のすぐ下には3本の水平の隆起線が入っている。

■ II-c-9 リプニャゴヴァ Lipnyagova(リプニャゴヴォ Lipnyagovo) 鍔

西シベリアのクルガン州、チェリャビンスクから東南東へ約250kmあまり、イセチ Iseti 川の東岸にリプニャゴヴァ村はある。発見の状況など、詳細は不明。把手が1つと圈足部が欠損している(図14)。口縁から少し下の水平隆起線から方形把手が立ち上がり、把手の中間を隆起線が走っていること、口縁とその下の隆起線からそれぞれ玉のれんが垂れていること、把手の下の縦の四分分割線の間縦に2列のコンマ紋様が走っていること、それと90°の位置には2本ずつの垂直隆起線が走っていること、すべてソリヴァイチェゴドスク鍔 II-c-1と同じである。ただし玉のれんの数少ない。把手の下の玉のれんの本数が、リプニャゴヴァ鍔では3本と1本少ない。ソリヴァイチェゴドスク鍔ではコンマ紋様の下に逆三角形の紋様が見られるが、リプニャゴヴァ鍔では火を受けたせいか見られない。リプニャゴヴァはソリヴァイチェゴドスクから南西に1,200km離れている。

■ II-c-10 ベロゼルスコエ Belozerskoye 鍔

クルガン州北部のベロゼルスコエ地区のトボル川の近くで地元住民が鍔の断片を偶然発見し、2016年秋にクルガン州博物館の考古学研究室に持ち込んだ。方形の把手の上に2つ(1つは欠損)のキノコが立つが、キノコの傘はきわめて小さい(図15)。把手の両側にキノコはなく、鋭い突起が付いている。この突起は匈奴の鍔に見られるので、この鍔は匈奴からフンへの発展過程を示すものであろう。

■ III-c-1 ムルン Mörön? 鍔

2011年の発表ではまだ所有権がはっきりせず(2『ヴォルゴグラード・プラウダ』2019年8月15日

ず、日本人は写真を撮ることが許されなかったが、2019年に私が訪れた時には博物館の所有になり、自由に撮影することができた(図16)。それを見る



図13 II-c-6, サマラ Samara 鍔, ヴォルガ中流



図14 II-c-9, リプニャゴヴァ Lipnyagova 鍔, 西シベリア(シャドリンスク Shadrinsk 市博物館蔵)



図15 II-c-10, ベロゼルスコエ Belozerskoye 鍔, 西シベリア

と、把手の上の3つの突起がボタン状にふくらんでいるが、キノコの傘ほど大きくない。把手の両側に鋭い突起が付いている。

Ⅲ. フン型鍍に関する考察

フン型鍍は、厳密に定義すると、胴部が縦長で膨らみがなく、凸線(隆起線)によって四分分割され、取っ手は方形であり、しばしばその上と両脇にキノコの傘の形をした装飾が付くものということができよう。

1. 出土点数、出土地

この定義に基づいてこれまでの出土例を計算すると、東ヨーロッパにはやや疑わしいものも含めて、キノコ傘付き完形品が6例(図2-1,3)、キノコ傘なし完形品が1例(図2-2)、キノコ傘の断片が7例、胴部だけの断片が7例となる。

黒海西北岸からウラルまでには、存在の疑わしい2例を除いて、キノコ傘付き完形品が5例(図12)、キノコ傘なし完形品が7例(図11,14)、キノコ傘の断片が5例(図7,10,13,15)、キノコ傘なしの把手の断片が1例、胴部の断片が2例である。中央アジアからモンゴルまでには、キノコ傘付き完形品が1例(図17)、キノコと言うよりもボタン状のものが3点(図16)である。

合計すると、キノコ傘付き(ボタン3例を含む)完形品が15例、キノコ傘断片が12例、キノコ傘なし完形品が8例、キノコ傘なし把手の断片が1例、胴部だけの断片が9例となり、全部で45例となる。2011年の発表時と比べると、13例増えている。

この数は、スキタイ時代やサルマタイ時代の鍍と比べると、ずいぶん少ないと感じられるかもしれない。しかし、このことからフン型鍍の実数も少なかったと結論付けることはできない。というのは、スキタイ時代やサルマタイ時代の鍍が多く墓から出土しているのに対し、フン型鍍で墓から出土したものはほとんどなく、ローマの城塞址から出土したいくつかの断片を除くと、偶然の発見によるものが多いからである。しかし近年、金属探知機の使用などにより発見例が増えていることは確かである。

2. 用途、意味

出土地は川岸や水辺が多いため、川や水と関連する儀礼で使われ、そのあと埋納されたと考え



図16 III-c-1, ムルン Mörön 鍍. モンゴル西北部(ムルン博物館展示)



図17 III-a-1, ウルムチ Ürümqi 南山鍍. 新疆ウイグル自治区博物館蔵

研究者が多い[Nestor, Nicolaescu-Ploșșor 1937: 182; Werner 1956: 60; Harhoiu, Diaconescu 1984: 106; Anke 1998: (1) 51]。中央アジアのサカが残したと思われる鍍もしばしば水辺近くで出土する。この点についてスパスカヤは、遊牧民が春に高地の夏営地に移動するときと秋に帰るときに、水辺で何らかの儀礼を執り行い、終わるとそこに埋納しておいたと考えた。メンヒェン=ヘルフェンは、この考えがフン型鍍にも当てはまると考えている[Спаская1956: 166-167(筆者未見、Maenchen-Helfen 1976: 330による)]。

一方で、イェンジホヴィツェ鍍(I-a-1)を墓からの出土品とみなすヴェルナーは、それを世俗的目的、すなわち日用に煮沸具として使われた可能性を

排除しない [Werner 1956: 60]。しかし器形が縦長で、しかも底の中央部に圈足があっては、火が当たる部分が少なく、煮沸具として実用的とは言えない。また縦長では重心が高く、圈足も小さくては不安定であり、この点から見ても非実用的と言わざるを得ない。キノコ形装飾のない鍍でも、イエンデホヴィツェ鍍以外はさまざまな装飾があり、すべて儀礼用の祭器とみなすべきであろう。

取っ手を飾るキノコ形装飾について、ヴェルナーはフン時代のディアデム(王冠)のいくつかに見られるキノコ形装飾と同じであり(前号の

図 3、9、10)、これらは世界樹=聖樹を象徴したものと考えた [Werner 1956: 59, 72]。その傍証として彼は、新羅の王冠に象徴的な樹木の装飾が表現されていることを挙げている。もしこの説が正しいとすると、キノコ形の装飾のある鍍も王冠と同様に王権を象徴するものということになる。

しかし鍍の取っ手を飾るキノコ形は、新羅の王冠の樹とはまったく形が異なっている。またコヴリグは、フン時代の王冠にはキノコ形ではなく鳥の頭が表現されているものもあるので、王冠と世界樹を常に結びつけるわけにはゆかず、キノコ形を世界樹とみなす説はいまだ証拠不十分と批判している [Kovrig 1973: 110]。たしかにコヴリグの批判は当たっているであろう。

胴部の四分割については、ボコヴェンコとザセツカヤが、世界に4つの地域があるという考えを匈奴が伝統的にもっていたことと関係づけているが [Боковенко, Засецкая 1993: 83; Zaseckaja, Bokovenko 1994: 707]、どのような論拠をもってそのような説を出したのか不明である。

3. 起源、伝播、編年

フン型鍍が東方に起源を持つことは、ほとんどすべての研究者が認めている。ただし西方に伝わってきた段階で、サルマタイの鍍の影響を受けたとする研究者もいる。ヴェルナーは、取っ手の上のキノコ形装飾を、サルマタイの鍍に見られる3つのボタン形突起から発展したものと考えた [Werner 1956: 59]。またアンケは、後期サルマタイの鍍がやや胴

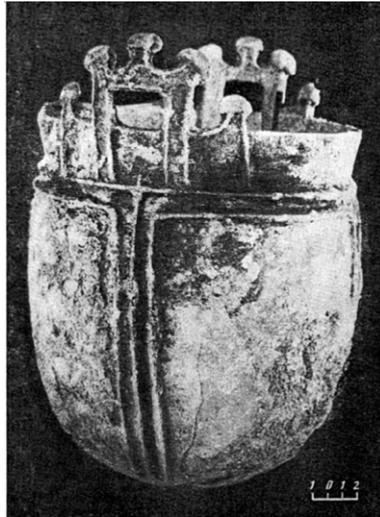


図 18 II-c-8, クズル・アドウル Kyzyl-Adyr 鍍. ウラル南部

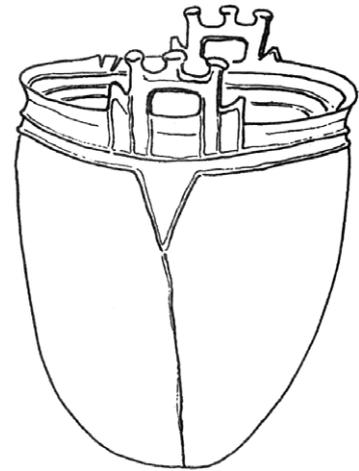


図 19 III-b-1, チョルナヤ・クリヤ鍍. アルタイ

長で円筒形に近くなる点に注目し、その形状がフン型鍍に影響を与えたと考えている。さらにクズル=アドウル鍍(図 18)のキノコの先端がやや丸くなっている点をサルマタイのものとみなし、ヴェルナーと同様に、サルマタイのボタン形突起からクズル=アドウルのキノコを経てフン型の平面的キノコへと変化したと考えている [Anke 1998: (1) 49-50]。また両説を比較して、現状ではどちらとも言えないとする人もいる [Masek 2017]。

しかしこのようにサルマタイの影響を重視する見方は少数派で、多くの研究者はサルマタイの鍍とフン型鍍とは関係ないとみなしている [Kovrig 1973: 104; Maenchen-Helfen 1973: 332; Боковенко, Засецкая 1993: 74; Засецкая 1994: 107; Érdy 1995]。その最大の根拠は、フン型鍍の最大の特徴である胴部を凸線で四分割する紋様、そして方形の取っ手、このどちらもがサルマタイの鍍には見られないことである。

また、キノコ形の装飾についても、東方の山字形取っ手とその両側の突出部から発達したとする見解が出てきた [Érdy 1995: 23, 42]。エールディの考えをまとめると、以下のような順番になる。

- (1) 南シベリアから西シベリアにかけて分布する円形取っ手の上に3つの立体的キノコ(ボタン形突起)が立つタイプ
- (2) 山字形5突起方形取っ手→チョルナヤ・クリヤ鍍(図 19: III-b-1。方形取っ手の上の3突起はややキノコに近いが、両側の突起は単なる尖

端)

(3 クズル=アドゥル鍔(図 18: II-c-8. 方形取っ手の上の突起だけでなくその両側の2突起もすべて立体的なこぶ状になるが、まだ完全なキノコ形ではない)

(4 平面的なキノコ形が立つタイプ

この順番は匈奴が西方へ移動してフンになる過程を示しており、匈奴がトバ・ミヌシンスクにいたのが前2世紀～後2世紀、トボル・イルティシュ・オビ中流域にいたのが後3世紀、そして4世紀初にウラル山脈をイェカテリブルグ付近で越えたとする [Érdy 1995: 45]。ウルムチ鍔(III-a-1)については、西方から戻ってきたものとするボコヴェンコ・ザセツカヤ説に反対し、アルタイ付近で初期に発達したものとし、2世紀後半の後漢代とみなす [Érdy 1995: 46]。

このエールディの説には、2つの大きな問題がある。まず3つの立体的キノコ(ボタン形)突起は南シベリアから西方に多く分布し、北中国・モンゴルではずっと後の北魏時代に編年されている内モンゴルのホリンゴル鍔を除くと、かろうじてイルクーツク付近に2点知られている程度である。つまり匈奴の本拠地では今のところ1点も発見されてい

いのである。また、小さな装飾が徐々に肥大化してゆくという発展は考古学上しばしば見られるパターンであるが、3つの立体的キノコから山字形に矮小化するという変化は、常識では考えられない。

エールディ説には、ウルムチ鍔の編年をそれほどに古くすべきかという問題もある。この点についてはアンケが、西方のフン型鍔との比較から、そんなに古いということはないと批判している [Anke 1998: (1) 54]。アンケはウルムチ鍔を西方から持ち込まれたものと考えているので、エールディ説には賛成できないであろう。コッホも、4世紀末～5世紀中頃としている [Koch 2007: 288]。

2007年にドイツで開かれた新疆維吾爾自治区新

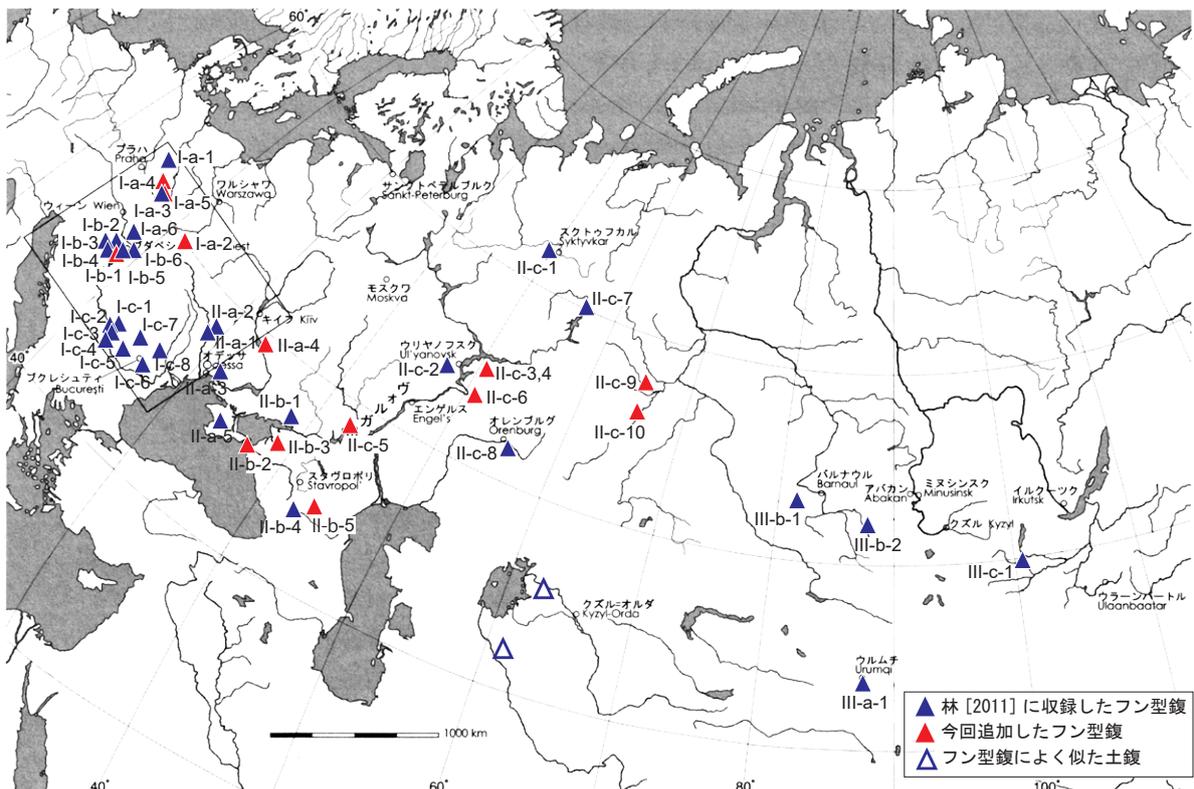
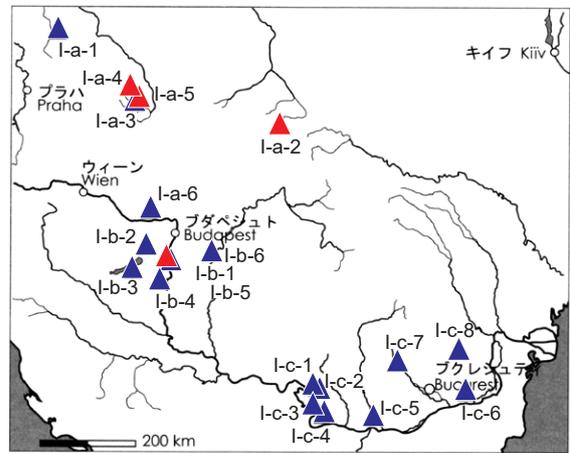


図 20 フン型鍔の分布(林 2011: 地図 1, 2 に加筆)

出土品の展覧会カタログでは、ウルムチ鍔の年代を100～400年としているが[Wieczorek, Lind 2007: 280]、これではあまりに年代幅が広すぎる。

フン型鍔の起源を漢代の中国北部あるいは匈奴時代のモンゴル高原にもとめる考え方には、高濱が重要な指摘を行っている。それは、前漢以降の圈足を持つ鍔(高濱分類のE式)の取っ手の断面が、凹字形を呈しているという指摘である[高濱 2011]。この特徴はスキタイやサルマタイの鍔には見られないが、フン型鍔には必ず見られるのである。このこともまた、フン型鍔の東方起源を強く裏付けている。

4. 型式、分類

フン型鍔の型式分類の試みはこれまでに何人かの研究者によって行われている[Kovrig 1972; Harhoiu, Diaconescu 1984; Bokovenko, Zaseskaya 1993; Érdy 1995]。しかしアンケも指摘しているように、個々の鍔の特徴が重なり合うことが少なく、いくつかのグループにまとめることができないため、いずれの試みも成功しているとは言い難い[Anke 1998: (1) 50]。つまり、極端なことを言えば、それぞれの鍔1点が1型式をなすことになってしまうのである。

出土地ごとにまとめようとしても、なかなかうまくゆかない。たとえば、取っ手の上にキノコ形装飾がない鍔は比較的東部のウラル・ヴォルガ地区に多いように見えるが、鍔の分布の最も西端に当たるポーランドにもあり、東端に当たる西シベリアにもある。またウラル・ヴォルガ地区の2点(II-c-1とII-c-2)は取っ手の下方に逆三角形の紋様があるが、これと同じ紋様は鍔の分布の東端にあるウルムチ鍔(III-a-1)にしか見られない。オソカ鍔(II-c-2)と同じ取っ手は、黒海北岸のオルビアで発見されている(II-a-3)。ただし玉のれんの数は違うが、方形の把手の中に隆起線のある紋様はウラル西北方のソリヴィチェゴドスク鍔(II-c-1)と西シベリアのリブニャゴヴァ鍔(II-c-9)に見られるが、これも玉のれんの数は違う。

キノコの傘の大きさに着目すると、大きいものはハンガリー、ルーマニアに多く、中くらいのものは東部に多いが、東部のヴォルゴグラード近くの鍔(II-c-5)は大きい。ウルムチ鍔は取っ手の下の口縁部に鋸歯紋様が見られるが、これと同じ紋様はハンガリーのラードプスタ鍔(I-b-3)にしか見られない。

しかし上記のウラル西北部の鍔とのみ共通する特徴、逆三角形紋様があることを考慮すると、ウルムチ鍔を単純に東欧からの里帰り品とみなすわけにはゆかない。

このように、個々の特徴が各地に分散している状況では、「ドナウ中流型式」とか、「ウラル・ヴォルガ型式」というような分類をすることはできない。従って、大雑把ではあるが、東は天山東北麓から中東欧まで、北はウラル西北部から南は北カフカスまで、ユーラシア草原地帯のほぼ西半分、東西約5000km、南北約2000kmの空間を、一つのまとまった地域として捉えざるを得ない。

これほどに広大な空間を一地域として捉えるなどということは非常識と思われるかもしれないが、実はユーラシア草原地帯ではそれほど突飛な発想ではない。スキタイ時代やサルマタイ時代、このあとのテュルク時代やモンゴル時代にも、同じような傾向が見られるのである。そしてほとんどの研究者が考えているように、ウルムチ鍔とクズル=アドゥル鍔を含めて、フン型鍔はこの広大な空間で、4世紀後半あるいは末から5世紀前半という、比較的狭い年代の中におさまってしまうのである。

IV. まとめ—全体のまとめを兼ねて—

最後に、東方の鍔からフン型鍔への発展の道筋の仮説を提示しておこう。

- (1) 前1～後1世紀頃、中国北部とモンゴル高原で、胴部に連続円弧紋、口縁部に山字形方形把手(断面凹字形)とその両側に小さな突出部を持つ鍔が現れた(図21: III-c-3)。高濱分類のEb、Ec型式に当たる。
- (2) 後1～2世紀頃、円弧紋はまず上の部分が水平になり、柄の両側の突出部の先端が尖っていった(図22: III-c-2)。円弧紋の下部分が垂直になり、四分割凸線に近くなる。高濱分類のEd、Ee型式に当たる。
- (3) おそらく2～3世紀、あるいは4世紀前半に、西モンゴルからアルタイ方面で、把手の上の山字形突起が発達して3つのボタン形突起になる(図16, 19)。さらにボタンから小さなキノコの傘になるが、まだ両側の突起は尖ったままである。また二重凸線による胴部の四分割が始まる(図16)。

(4) おそらく4世紀後半、取っ手の両側突起が分離し始める(図18)。キノコの傘が平面的になり、口縁部に細かい格子紋やジグザグ紋、取っ手の下方に逆三角形紋あるいは下向きの矢のような紋様が施されるようになる(図17)。

(5) 4世紀末～5世紀前半、中央アジア北部から短期間のうちにウラル・ヴォルガ、北カフカス・黒海北岸、ドナウ川流域に広まる。この期間の中で、キノコの傘が小さいものはより早く、傘が大きいものはより後期のものであろう。

上記のようなフン型鍍の発展・伝播の状況は、まさしく匈奴の一部が西方へ移動してフンという名称で知られるようになり、北カフカス、黒海北岸、ドナウ川流域で活動したことを示していると言えるのではないだろうか。

後1～2世紀頃モンゴル高原にいた匈奴の一部が、2～3世紀に中央アジア北部に移動し、しばらくそこに留まっていた。勢力を蓄えていたのかもしれないし、また現地の遊牧民との融合も進んだかもしれない。そして4世紀後半に強大となったその勢力は、一気に草原地帯を西に進んだという構図が描けるのではないだろうか。

ただし、チョルナヤ・クリヤ鍍やムルン鍍(図16, 19)と、ウルムチ鍍(図17)との間には、かなり大きな違いがあることも確かである。鍍以外のこの時代の出土品、紅色の大き目の石を象嵌した金製装飾品や木製鞍の居木先を飾る金製・銀製薄板などは、中央アジア北部、カザフスタンから始まり、西方に分布する。これらのことを考慮すると、中央ア

ジア北部、カザフスタンに長期間滞在する間に匈奴は文化的・社会的にかなり大きく変質を遂げていた可能性がある。とすれば、匈奴はそのままフンになったわけではなく、途中で一段落間を置き、その間に大きく変貌してから西方に進出したと言えるかもしれない。

参考文献:

<日本語>

草原考古研究会編 2011『鍍の研究—ユーラシア草原の祭器・什器—』雄山閣。

高濱秀 2011「中国の鍍」『鍍の研究—ユーラシア草原の祭器・什器—』雄山閣: 9-93.

東京国立博物館編 1997『大草原の騎馬民族: 中国北方の青銅器』東京国立博物館。

林俊雄 1995「フン族あらわる」『歴史と気候』(講座 文明と環境 6) 朝倉書店: 78-92.

林俊雄 2011「フン型鍍」『鍍の研究—ユーラシア草原の祭器・什器—』雄山閣: 341-382.

<中国語>

郭物 2007「第二群青銅(鉄)鍍研究」『考古学報』2007-1: 61-96.

<欧文>

Akischev K. A.: Акишев К.А., 1978, *Курган Иссык*, М.: Искусство. [『イッシク・クルガン』]

Anke Bodo, 1998, *Studien zur Reiternomadischen Kultur des 4. bis 5. Jahrhunderts*, Weissbach: Beier & Beran.

Anke Bodo, Révész László, Tivadar Vida, 2008, *Reiter-völker im Frühmittelalter: Hunnen - Awaren - Ungarn*, Stuttgart: Theiss.

Vokovenko, N. A., Zasetzkaya, I. P.: Бокovenko Н.А., Засецкая И.П., 1993, Происхождение котлов «гуннского типа» Восточной Европы в свете проблемы хунно-гуннских связей, *Петербургский археологический вестник* 3, ФАРН: 73-88. [「匈奴-フン関係の問題に照らした東欧の“フン型”鍍の起源」『ペテルブルク考古学報』3]

Bóna Istován, 1991, *Das Hunnen-Reich*, Budapest: Corvina.

Botalov S. G.: Боталов С. Г., 2009, *Гунны и тюрки (историко-археологическая реконструкция)*, Челябинск: ООО «ЦИКР



図21 III-c-3, ノヨン・オー
ル Noyon-uul 鍍. モンゴル北
部.(エルミタージュ蔵)



図22 III-c-2, 東京藝術大学
鍍. 北中国か(東京藝大美術
館蔵)

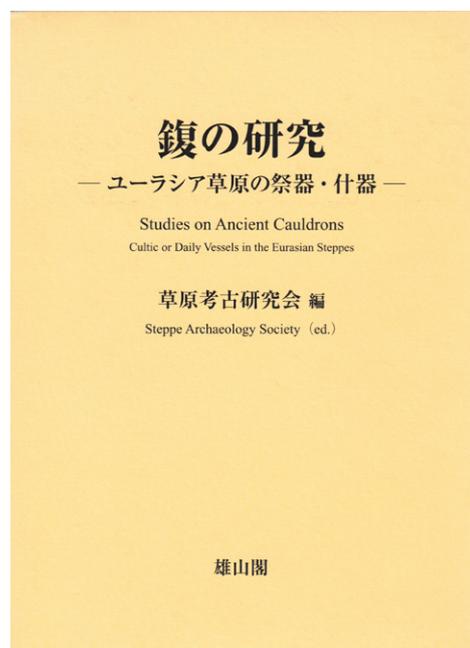
- «Рифей». [『フンとテュルク(歴史・考古学的復元)』]
- Botalov S. G.: Боталов С. Г., 2019, *Эпоха Великого переселения народов и раннее средневековье Южного Урала (II-VIII вв.)*, Челябинск: Издательский центр ЮУр ГУ. [『南ウラルの民族大移動期と初期中世(2~8世紀)』]
- Demidenko S. V., 2008, Zum gegossenen Bronzekessel aus dem Hort vom Berg Bestau, Nordkaukasien, *Eurasia Antiqua 14: Zeitschrift für Archäologie Eurasiens*, Deutsches Archäologisches Institut, Eurasien-Abteilung: 233-240.
- Érdy Miklos, 1995, Hun and Xiong-nu Type Cauldron Finds throughout Eurasia, *Eurasian Studies Yearbook 67*, Eurolingua: 5-94.
- Giumlíá-Mair A., 2013, Metallurgy and Technology of the Hunnic Gold Hoard from Nagyszéksós, *The Silk Road, vol. 11*, The silkroad foundation: Saratoga: 12-35.
- Harhoiu R., Diaconescu P., 1984, Hunnischer Kessel aus Muntenien, *Nouvelle. série: revue d'archéologie et d'histoire ancienne 28*, Académie de la République populaire roumaine: 99-116.
- Honti Szilvia, 2007, Une découverte récente: un chaudron hunnique intact en Hongrie, *L'Archéologue No.93*: 44.
- Honti Szilvia, Németh Péter G., 2007, Hun áldozati üst Balatonlelle-Rádpusztáról, *Somogyi Múzeumok Közleményei 17/A (2006)*, Kaposvár: 71-78.
- Kahoun Martin, 2019, Conservation of a Fragment of Hunnic Cauldron from Milotice nad Opavou, *Forum for Conservators-Restorers IX/2*, Technické muzeum v Brně: 126-133.
- Kaminskii M. M., Mastykova A. V.: Каминский М. М., Мастыкова А. В., 2009, «Царские» гунны и акациры, *Гунны, готы и сарматы между Волгой и Дунаем*, СПб: СПб ГУ: 114-126. [『“王族”フンとアカツイロイ』『ヴォルガとドナウの間の匈奴、ゴート、サルマタイ』]
- Kanimetov A. et al.[eds.]: Каниметов А., Маршак Б. И., Плоских В. М., Шер Я. А. [ред.], 1983, *Памятники культуры и искусства Киргизии: Каталог выставки*, Л: Искусство. [『キルギスの美術と遺跡』]
- Koch A., 1997, Ein hunnischer Kessel aus Westchina, *Archäologisches Korrespondenzblatt 27*, Mainz: Römisch-Germanischen Zentralmuseums: 631-643.
- Kovrig Ilona L., 1973, Hunnischer Kessel aus der Umgebung von Várpalota, *Folia Archaeologica 23*, Budapest: 95-121.
- Kožomberdieva, E. I., Kožemjako, P. N., 1998, Ein Katakombengrab aus der Schlucht šamsi, *Eurasia Antiqua: Zeitschrift für Archäologie Eurasiens 4*, Deutsches Archäologisches Institut, Eurasien-Abteilung: 451-471.
- Kruglov E. V.: Круглов Е. В., 2021, О бронзовом котле «гуннского типа», обнаруженном у восточного берега Цимлянского водохранилища, *Из истории культуры народов Северного Кавказа*, Ставрополь: Печатный Двор: 111-137. [『ツィムリヤンスク貯水池東岸付近で発見された“フン型”鍔について』『北カフカスの人々の歴史文化から』]
- Limberis N. Yu., Marchenko N. Yu.: Лимберис Н. Ю., Марченко И. И., 2011, Погребения эпохи великого переселения народов и раннего средневековья из курганов степного Прикубанья, *Stratum plus: ВАШ археологический журнал, 5*, Высшая Антропологическая Школа: 417-441. [『プリクバン草原の古墳より民族大移動期と初期中世の埋葬』]
- Maenchen-Helfen Otto, 1973, *The World of the Huns: Studies in Their and Culture*, Berkeley: University of California Press.
- Мамаев Kh. M.: Мамаев Х. М., 2014, «Княжеское» погребение у г. Магас (Ингушетия), *Краткие сообщения Института археологии, вып.234*, М: 55-71. [『マガス(イングシェチア)付近の“貴族”墓』『考古学研究所短報』234]
- Masek Zsófia, 2017, A Fresh Look at Hunnic Cauldrons in the Light of a New Find from Hungary, *Acta Archaeologica 68*, Academiae Scientiarum Hungaricae: 75-136.
- Masek Zsófia, 2018, Új szempontok a hun kori üstök kutatásához egy új magyarországi lelet tükrében, *Dissertationes Archaeologicae. Supplementum 2*, Budapest: 45-127.
- Menghin Wilfried [ed.], 2007, *The Merovingian Period: Europe without Borders: Archaeology and History of the 5th to 8th Centuries*, Wolfratshausen: Edition Minerva.
- Nestor Jon, Nicolaescu-Plopşor, C. S., 1937, Hunnische

- Kessel aus der Kleinen Walachei, *Germania* 21-3: 178-182.
- Okońska-Bulas M., Bulas J., Mazurek M., Garbacz-Klempka A., Perek-Nowak M., 2020, A Newly Discovered Fragment of a Hunnic Cauldron from Site 59-60, Sanok, Poland, *Acta Archaeologica Carpathica LV*, Państwowe Wydawnictwo Naukowe: 235-254.
- Redina E. F., Rosokhats'kii O. A.: Редина Э. Ф., Росохатський О. А., 1994, До вивчення гунських старожитностей Північно-Західного Причорномор'я, *Археологія* 1994-3, Київ: 152-155. [「黒海北西部のフン遺物の研究」『考古学』1994-3]
- Reinecke P., 1896, Die skythischen Alterthümer im mittleren Europa, *Zeitschrift für Ethnologie* 28: 1-43.
- Spasskaya E. Yu.: Спасская Е. Ю., 1956, Медные котлы ранних кочевников Казахстана и Киргизии, *Ученые записки Алма-Атинского гос. пед. института. Серия гуманитарных наук, т. XI/1*, Алма-Ата: 155-169. [「カザフスタンとキルギスの初期遊牧民の銅鍍」『アルマ - アタ国立教育研究所学術報告』人文科学シリーズ XI/1 巻]
- Takács (Takáts) Z., 1955, Catalaunischer Hunnenfund und seine ostasiatischen Verbindungen, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 5(1/2), Budapest: 143-173.
- Wieczorek, A., Lind, Ch., 2007, *Ursprung der Seidenstrasse: Sensationelle Neufunde aus Xinjiang, China*, Stuttgart: Konrad Theiss Verlag.
- Wosinszky Mór., 1891, A kaposvölgyi népvándorlaskori üst, *Archaeologiai Értesítő* 11, Magyar Tudományos Akadémia: 427-431.
- Zaseckaja, I. P., Bokovenko, N. A., 1994, The Origin of Hunnish Cauldrons in East-Europe, *The Archaeology of the Steppes: Methods and Strategies*, Napoli: Istituto Universitario Orientale: 701-724. (Бокovenko, Засецкая 1993 の英訳)
- Zasetskaya I. P.: Засецкая И. П., 1968, Полихромные изделия гуннского времени из погребений Нижнего Поволжья, *Археологический сборник, вып. 10*, Л.: 35-53. [「ヴォルガ下流の遺跡から出土したフン時代の多色象嵌製品」『考古学論集』10]
- Zasetskaya I. P.: Засецкая И. П., 1994, *Культура кочевников южнорусских степей в гуннскую эпоху (конец IV-V вв.)*, СПб: Эллипс. [『フン時代の南口

シア草原の遊牧民文化(4世紀末～5世紀)』]

図版出典:

- 図 1-1. Demidenko 2008: 236, Abb.3-1; 図 1-2~4. 著者撮影 図 2. 著者撮影 図 3. Okońska-Bulas et al. 2020: 237 図 4. Kahoun 2019: 133, Obr.19; 図 4-2. 同 Obr.11 図 5 左 .Břıza - Janáková 2016: 42, 右 . Loskotová 2013: 140, obr.92 図 6. Masek 2015: 1, obr.1, 2 図 7. Masek 2017: 78, Fig.7 図 8. Masek 2018: 51, 8. kép 図 9. Н.Ю.Лимберс - И.И.Марченко, 2011: 423, ris.5. 図 10. Мамаев 2014: 63, ris.4 図 11-1. Masek 2018: 53, 12. kép; 図 11-2. Боталов 2019: 104; 図 11-3. Тюрко-Татарский Мир(www.tataroved.ru) 図 12. Kruglov 2021:131, 135 図 13. Masek 2018: 54, 13. kép 図 14. Боталов 2019: 102 図 15. Рябинина 2016: 54, рис.1-6 図 16, 17. 著者撮影 図 18. Garyainov 1980: 262, ris.3 図 19. Bokovenko & Zasetskaya 1993: 81, ris.6 図 20. 著者作成 図 21. 著者撮影 図 22. 東京国立博物館 1997: 135, No.230



本稿は『鍍の研究—ユーラシア草原の祭器・什器—』(2011)に収録されている林俊雄「フン型鍍」に新たに報告された資料を加え、増補したものである。

表1 フン型鍔一覧表

分類	遺跡	国、地方	高 (cm)	把手				器体				器体	
				上の茸	両側 茸	茸大 小	中の紋 様	全体	口縁直下	4分割 線	玉の れん	逆三角形	
I-a-1	イェンジホヴィツェ Jędrzychowice	ポーランド	55					縦長寸胴		1本			
I-a-2	サノク Sanok		断片							3本			
I-a-3	ラーゾヴァー Rázová	チェコ	断片	3	?	中				3本			
I-a-4	ミロティツェ Milotice		断片							3本			
I-a-5	リヒノフ Lichnov		断片			中							
I-a-6	イジャ Iža	スロヴァキア	断片							3本			
I-a-7	ウィーン購入 Vienna (purchase)	オーストリア?	断片	4	?	大							
I-b-1	オーチャ Ócsa	ハンガリー	断片						ジグザグ	3本			
I-b-2	ヴァールパロタ Várpalota		57.5+		4	大		縦長寸胴		2本× 2			
I-b-3	ラードプスタ Rádpusztá		60+	3	2	大		縦長寸胴	ジグザグ	3本	あり		
I-b-4	カボシュ谷 Kapos-vörögy		57	3	2	大		縦長寸胴	細かい格子	1本	あり		
I-b-5	ドナウーイヴァーロシュ Dunaújváros		断片								3本		
I-b-6	テルテル Törtel		88-89	4	2	大		縦長寸胴	細かい格子	2本× 2			
I-c-1	ヒノヴァ Hinova	ルーマニア	断片							3本			
I-c-2	ホタラニ Hotărani		断片	3	?	中							
I-c-3	西オルテニア West Oltenia		断片			大							
I-c-4	デサ Desa		54.1	3	2	大		縦長寸胴		3本	あり		
I-c-5	チェレイ(スキダワ)Celei (Sucidada)		断片			大					3本		
I-c-6	ボシュニャグ Boşneagu		断片	3	?	大							
I-c-7	ヨネシュティ Ioneşti		71.4	3	2	大		縦長寸胴			3本		
I-c-8	スディツイ Sudiţi		断片								3本?		
II-a-1	シェスタチ Şestaci	モルドヴァ	53	4	2	大		縦長寸胴		3本	あり		
II-a-2	ティムコヴォ Timkovo	ウクライナ	断片	3	?	大							
II-a-3	オルビア Olbia		断片				列点					あり	
II-a-4	ペレヴォロッチナ Perevolotchna		断片	1+	1+	中	列点		細かい格子				
II-a-5	シンフェロポリ Simferopol'	クリミア	断片							3本	あり		
II-b-1	イヴァノフカ Ivanovka	アゾフ海北岸	39	3	2	中		小型寸胴		2本			
II-b-2	ブジョル(アナパ) Buzhor (Anapa)	西北コーカサ ス	断片						列点	2本	あり		
II-b-3	マライ(クバン) Malai (Kuban)		50				玉のれ ん列点	すぼまる		2-3本	あり		
II-b-4	ハバズ Khabaz	北コーカサ ス	57.5	3	2	中		縦長寸胴		3本	あり		
II-b-5	ナスル・コルト Nasyr-Kort		断片			中			大まかな格子	3本			
II-c-1	ソリヴァイチェゴドスク Sol'vychevodsk	モスクワ北方	53+				隆起線	縦長寸胴	玉のれん	2本	あり		
II-c-2	オソカ(ソカ) Osoka (Soka)	ヴォルガ中流	53.5				列点	縦長寸胴	玉のれん	2-3本	あり	逆三角形	
II-c-3	スンチェレイエヴォ1号鍔 Suncheleyevo №1		50数				列点	縦長寸胴	玉のれん	1本	あり	?	
II-c-4	スンチェレイエヴォ2号鍔 Suncheleyevo №2		50数	把手半円				縦長寸胴		1本			
II-c-5	ツィムリャンスコエ Tsimlyanskoye	ドン川下流	90+	3	2	大	列点		列点ジグザグ	2本	あり		
II-c-6	サマラ Samara	ヴォルガ中流	断片		1+	中			細かい格子	3本			
II-c-7	ソリカムスク Solikamsk	ウラル中北部	60?	小突起1			隆起線	すぼまる	大ジグザグ				
II-c-8	クズル・アドウル Kyzyl-Adyr	ウラル南部	34.5	3	2	小		膨らむ		3本			
II-c-9	リプニャゴヴァ Lipnyagova	西シベリア	50数				隆起線	縦長寸胴		1-2本	あり		
II-c-10	ベロゼルスコエ Belozerskoye		断片	3	突起	小							
III-a-1	ウルムチ Ürümqi 南山	新疆	57+	3	2	中	隆起線	底部丸み	格子・ジグザ グ	4本		逆三角形	
III-b-1	チョルナヤ・クリヤ Chernaya-Kur'ya	露領アルタイ		ボタン	突起	小		底部丸み		1本			
III-b-2	ビュシュク Byushk				小突起3				底部丸み	連続×字			逆三角形
III-c-1	ムルン Mörön 博物館	西北モンゴル	上半分	ボタン3	突起					4本			

*色塗りの行は、今回追加報告した資料で、2011年発表[林2011]にない資料